佐々木邦全集

第九巻

佐々木邦全集9　苦心の学友　全権先生
村の少年団　トム君サム君

昭和五十年六月二十日　第一刷

著者　佐々木邦
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―十二―二十一　郵便番号一一二
電話東京(〇三)九四五―一一一一(大代表)　振替東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社大進堂

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
©佐々木孝雄　一九七五年

定価は外箱に表示してあります（文2）

目次

苦心の学友　5
全権先生　191
村の少年団　277
トム君サム君　447
解説・尾崎秀樹　530

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

苦心の学友

お屋敷からのお召

夕刻のことだった。

「内藤さん、速達！」

と呼ぶ声が玄関から聞えた。郵便物と新聞は正三君が取次ぐ役だ。

「お父さん、速達ですよ」

「ふうむ。何御用だろう？」

とお父さんは居住いを直して、大きな状袋の封を丁寧に鋏で切った。伯爵家から来たのである。

正三君のところはお祖父さんの代まで花岡伯爵の家来だった。尤もその頃は伯爵ではない。お大名だから、お殿様だった。今でも伯爵のことをお殿様と呼んでいる。正三君のお祖父さんは大殿様から三百石戴いていた。今なら年俸である。お金の代りにお米を三百石貰う。一石三十円として九千円。今の大臣以上の俸給だった。

「三百石といえば大したものだよ。陸軍大将になった本間さんなんか三人扶持の足軽だった。実業界で幅を利かしている綾部さんが精々五十石さ。溝ロの叔母さんのところが七十石。お前のお母さんの里が百石」

と正三君は三百石の豪いことをお父さんから度々聞かされていた。

「これ、お貞、お貞、お貞、お貞」

とお父さんは返辞のあるまで呼び続けるのが癖だ。

「はい〳〵、はい〳〵、はい」

とお母さんも返辞だけして、ナカ〳〵仕事の手を放さない癖がある。

「お貞や、お屋敷からのお手紙だ」

「まあ」

「お殿様が俺に相談があるそうだ」

「御冗談でムいましょう？」

「いや、ほんとうだよ。御覧」

とお父さんは得意だった。

肅啓

時下残暑凌ぎ難く候処益々御清穆の御事と存上候　却説伯爵様折入って直々貴殿に御意得度思召に被在候間明朝九時御本邸へ御出仕可然此段申進候　早々頓首

花岡伯爵家
富田弥兵衛

八月十五日

内藤常太郎殿

富田さんは家令だ。もう年寄で目が悪いから一寸角ぐらいの字で書いてある。

「まあ、何でございましょうね？」

とお母さんは合点が行かなかった。大将や重役になっている家来達のところへは時折特別に有難いお沙汰があるそうだが、三百石の内藤常太郎さんはそれほどまで出世して

いない。正月の二日に御機嫌を伺って四月の観桜会へ招かれるだけだった。
「何だろうなあ？」
「あゝ、分りましたよ」
「何だ？」
「あなたが余り御無沙汰をしていらっしゃるから、呼び出して切腹仰せつけるのかも知れませんよ」
「馬鹿を言うな。これは決して悪いことじゃない」
「そうだとよろしゅうございますがね」
「そうでなくてどうする？　お殿様直々折入ってお願いがあるというんだもの。お前は俺にもっと敬意を表さなければいけないよ」
とお父さんは威張って見せた。
晩御飯の時も伯爵家の話が出た。何だか分らないが、番町のお屋敷からのお沙汰は皆の心持を陽気にした。
「お父さん、兎に角おでんと蜜豆が戴けますね」
と正三君が言った。
「おでんと蜜豆？」
「馬鹿だなあ。あれは観桜会の時だけだよ。お屋敷にふだんおでんや蜜豆があるもんか」
と兄さんの祐助さんが笑った。この春二人で観桜会へお父さんのお供をしたのである。
正三君は兄さんが二人と姉さんが二人ある。一番上の兄さんはもう帝大を卒業して朝鮮総督府へ勤めている。次の祐助君も来年出る。姉さんは一人女学校が済んで、もう一人在学中だ。正三君はこの四月から府立中学へ入った。五人が五人、皆揃って成績が好い。お父さんは鼻が高い。
「家の子供は皆俺に似たんだよ」
とおっしゃる。
「いゝえ、女の子は女親に似たんでございますよ」
とお母さんも権利を主張する。
内藤さんの子供が皆優良なのは無論お父さんお母さんの性質をうけている。尚お教育方法が与かって力ある。両親は一生懸命だ。しかし家庭の好いことも忘れてはいけない。好いといっても金持ではない。三百石のお祖父さんは、その後柄にない山仕事をやって失敗してしまった。郷里の家屋敷は人手に渡って跡に紡績工場が建っている。若し今でもあんな大きな家に住んで昔のまゝに威張っているとすれば、五人のお孫さんがこんなに優良かどうか甚だ疑問だ。
内藤さんは大蔵省へ勤めている。高等官だけれど、上の方でないから決して贅沢は出来ない。そうかといって生活に不自由を感じるほどの貧乏でもない。子供の為めにはこれぐらいの家庭が一番好いのである。
「内藤君、君のところのお子さん達は皆優等だそうだが、何か秘伝があるのかね？」
と同僚が訊く。
「秘伝なんかないよ。強いて言えば、僕が酒を飲まないからだろう」
と内藤さんはニコ〳〵する。
「耳が痛いな」
「もう一つ、僕の家の金は僕の汗の香がする。それで子供達も油断をしないんだろう」
「汗の香なら僕だって負けない。何か未だ他にあるだろ

う？」

と同僚は頻りに秘伝を知りたがる。

さて、内藤さんは翌朝八時半に番町のお屋敷へ出頭した。家令の富田さんも丁度出勤したところで、

「やあ／＼これは早い。御苦労ですな」

と言って迎えてくれた。内藤さんは書面のお礼を述べて御無沙汰のお詫をした後、

「時にお殿様の御用とおっしゃるのは何でございましょうな？」

と伺いを立てた。

「内藤君、君は羨ましいですよ」

「どういうわけですか？」

「君のところのお子さん達の成績がお殿様のお耳に入ったのです」

「まさか。豚児揃いですもの」

「いゝや。悪事千里を走る。善何ぞ門を出でざらんやです。そこで今回御三男様のお相手に君のところの末のお子さんを御所望なさるのです」

「はゝあ。お相手と申しますと？」

「お学友です。御勉学は申すに及ばず、御武術御運動お慰み、一々お相手を勤めます。大きな声では申されませんが、若様方は皆様どうもお姫様方ほど御成績が宜しくない。お殿様も奥様も種々とお考えになって、今度は御三男様を極く平民的に御教育なさる思召で、○○中学校へお入れになりました」

「成程」

「既に一学期おやりになりましたが、矢張り御成績が面白くありません。水は方円の器に随い人は善悪の友に依ると申しますから、これは成績の好いものをお相手につけるが宜しいということになりました。旧藩士の子弟の中に現在中学一年生で成績優等のものはないかとの御尋ねでございます。俺は方々問合せましたが、君のところが一番よく条件に叶っています。御身分も三百石、申分ない」

「いや、恐れ入ります。三百石は昔の話で、今は腰弁ですよ」

「いゝや。兎に角、と言っては失礼ですが、兎に角大蔵省の高等官です。お殿様はせめて高等官ぐらいの家庭でなければ困るとおっしゃいます」

「何から何までと申しますと学友は無論始終お屋敷へ上っているんでございましょうな？」

「そうです。御三男様と同じ学校へ通って、お屋敷では同じ家庭教師について勉強致します。今回は全然平民的教育ですから、中学校御卒業後直ぐさまアメリカへお出掛けになって、彼方の大学で仕上げるのだそうです。お学友もお供をして全く同様の教育を受けます。いかゞですな？」

「愚息で勤まることなら真に光栄に存じます」

「それじゃお受けをしてくれますな？」

「はあ」

「そうなくては叶わん。昔は若様の為めには伜を身代りに立てたものです。まして御令息将来の立身出世の道が開けることですからな」

と富田さんは大満足でお殿様へ取次いだ。

お殿様は朝寝坊だから、内藤さんは十時頃まで待たされた。しかしその間に富田さんから、尚お種々とお学友の心

得を承わった。
「此方へ」
　との案内で漸く応接間へ通って、こゝで又少時待っていると伯爵が現れて、
「やあ」
　とおっしゃった。
「御無沙汰申上げました。いつも御健勝で祝着に存上げます」
「有難う。さあ、掛け給え」
「はあ、はあ、はゝゝあ」
　と、内藤さんはお屋敷へ上るとすっかり侍になってしまう。
「役所の方は相変らず忙しかろうね？」
「はあ」
「今日は休んで来たかね？」
「御前、今日は日曜でございます」
「成程、そうだったな」
　とお殿様は七曜に御頓着ない。今日を日曜と知って大いに感心したのか、その儘黙ってしまった。そこで御家来の方から、
「この度は……」
　と切り出した。
「富田から聞いてくれたかな？」
「はあ」
「承知してくれるかな？」
「はあ、唯愚息に勤まりましょうかどうかと案じて居ります」
「それは大丈夫だ。君のところは皆揃って抜群の成績だそうだな」
「どう致しまして」
「参考の為め承わりたいが、一体どうしてそう成績が好いのだろう？」
「さあ」
「何か思い当ることはないかな？」
「強いて申せば、私が酒を一滴も戴かないからでしょうか」
　と内藤さんは同僚にもお殿様にも同じように答える。
「ふうむ。私は酒を飲む。これは耳が痛いぞ」
「恐れ入ります」
「何あに構わん。それからどうだね？」
「もう一つは……」
「何だな？」
「私の家の金には私の汗の香が沁みています。それで子供が油断をしないで勉強するのだろうと存じます」
「ふうむ。汗？」
「はあ」
「汗を金に沁まして置くか？」
「いゝえ、稼いだばかりの金でございますから」
「うむ。額の汗か。労働か。皮肉だな。ハッハ、、、」
　とお殿様は快く笑った後、
「万事富田と相談して、来月早々寄越して貰いたい」
「はあ」
「奥も君に会いたがっている。一寸顔を見せてやってくれ給え」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「はあ」
「暑いところを御苦労だったね」
「はあ」
と内藤さんがお辞儀をして頭を上げたら、伯爵はもう出て行ってしまっていた。
奥様には日本館の方で御機嫌を伺った。内藤さんは今回の平民教育がお殿様よりも奥様の御発意によることを承知した。奥様はお姫様達が女親に似て皆才媛だのに、若様達はどういうものか不成績で困ると訴えた後、
「内藤さん、どうか助けて下さい」
とおっしゃった。内藤さんは光栄身に余った。三代相恩の主君、その奥方が助けて下さいと仰せある。
「はあ、はゝゝあ」
と侍にならざるを得ない。
「私達の心持を察して下さい」
「はあ、はゝゝあ」
奥様のお話はナカ〳〵長かった。殿様と違って女の愚痴が交る。皆が寄ってたかって煽て上げるから、若様達は本気になって勉強しないとおっしゃった。我儘ものゝお相手は随分骨の折れることだろうと、仕事の性質をよく理解していられた。
「内藤さん、あなただけ御承知下すっても、こういうことはお母様に得心して戴かないと長続きが致しませんから、私、その中に改めてお願いに上りとうございます」
「どう致しまして。決してそのような御心配には及びません」
「いゝえ、昔とは違います」
「いや、私共は何処までも旧臣の身分でございます」
「未だ十三やそこらのお子さんですもの。それを私達の都合で両親の手から取ろうと申すのは余り勝手でございます。私、お母様のお心持が察しられますから、そこのところを直々お目にかゝって念の通じるように申上げたいと存じます」
「それでは家内を上らせましょう」
「いゝえ、私の心委せにしておくれ。それから内藤さん」
「はあ、はゝゝあ」
「これはお家へお土産に」
「どう致しまして、この上そんな御配慮を煩わせ申上げては益〻恐縮でございます」
「いゝえ、お忙しい処をお呼び立てして申し訳ありません」
「奥様、今日は日曜でございます」
「あ、そうでしたかね」
と奥様も日曜を御存じない。
内藤さんは拝領品を平に辞退して、逃げるように玄関へ向った。富田さんが待っていたので、又家令詰所というのへ入ってしばらく打ち合せをしている中に、
「自動車のお支度が出来ました」
と女中が知らせに来た。
「それでは内藤氏」
「富田様」
と一寸芝居のようなことをして、内藤氏は玄関へ出る。
「さあ、乗っていらっしゃい」
と富田さんは横づけになっている立派な自動車を指さし

た。
「いや、どう致しまして」
「いゝや、お殿様の仰せつけです」
「恐れ入りましたな」
と内藤さんは一礼して乗り込んだ。すると奥様からの拝領品が中に積んであったのに又々恐れ入った。
渋谷の内藤家では、
「ブー〳〵〳〵」
と自動車が門前で止まった時、
「家でしょうか？」
と次女の君子さんが玄関へ出て見た。お父さんは丁度下りたところで、
「正三はいるか？　正三は？」
と呼んだ。運転手が土産物を担ぎ込む。
「お帰りなさいませ」
「正三はいるか？　正三は？」
「正ちゃんはお隣りへ遊びに参りました」
「呼んで来ておくれ」
「まあ、あなた、お屋敷の御用は何でございましたの？」
とお母さんが訊く。
「その正三の件さ」
とお父さんは長火鉢の前に羽織袴のまゝ坐り込んで、
「正三をお屋敷の御三男様のお学友に欲しいとお殿様も奥様もおっしゃる。是非ともという御懇望だ。家の子供がこうまで評判が好いとは思わなかったよ。俺は面目を施して来た。御覧、この通り頂戴物をして来た」
と少し落ちついたようだった。
「それは結構でございました。そうしてあなたはお受けをなさいましたの？」
「受けるも受けないもない。此方は家来、むこうはお殿様だ。それに近い中奥様がお前のところへ直々頼みにお出になる」
「まあ！　私のところへ？」
とお母さんは飛び上らないばかりに驚いた。
そこへ正三君がお腹の時計でもうお昼時と承知してノコノコ帰って来た。
「正三！」
「はい」
「そこへ坐れ」
「はい」
と正三君は坐ったが、叱られるのかと思ってビク〳〵している。
「しかしその服装じゃ困るな。袴を穿いて来い」
「はあ」
「袴だよ。お貞、袴を出してやれ」
とお父さんは自ら羽織袴でかしこまっている。夏休みに子供の袴はそう右から左へは見つからない。
お母さんはあっちこっち探した末、正三君に袴をつけさせて、
「これで宜しゅうございますか？」
と不平そうな顔をした。
「よし。そこへ坐れ。正三や、お前のお蔭でお父さんは鼻が高い」
とお父さんは鼻の上へ拳を二つ継ぎ足して天狗の真似を

した。正三君は何のことやらサッパリ分らない。
「正三や、今お父さんの言うことはお殿様の仰せつけだ。謹んで承わりなさい。正三や」
「ハッハ、、、」
とこの時兄さんの祐助さんが笑い出した。
「何だ？　失礼な」
「……」
「でも正三や正三やって、まるで正三を売りに来たようじゃありませんか」
とお母さんも少しおかしかった。
「正三や、今日お屋敷へ上ったら……」
とお父さんは漸く不断の調子に戻って、お学友の次第を詳しく話して聞かせた。
「お父さん、それでは正三が可哀そうじゃありませんか？」
と祐助さんは必ずしも喜んでいなかった。
「何故？」
「こんな小さなものがお屋敷へ上って他人の間で揉まれるんですもの。奉公人も同じことです。僕がお父さんなら断ってしまう」
「それはお前、料簡違いだよ。お殿様の仰せ付けじゃないか？」
と内藤さんは昔なら君公の御馬前で討死をする覚悟がある。
「お殿様は昔のことです。今日では知人に過ぎません。全く対等ですよ。特別の契約を結ばない限り、権利義務の関係はありません」
と祐助君は法科大学生だ。
「権利義務の関係がないからといっても、お祖父さんの代までは所謂三代相恩の主君だったじゃないか？　我々が今日あるのも皆伯爵家のお蔭だよ」
「いや、お言葉を返しては済みませんが、これぐらいの今日は平民にもあります」
「どうもお前は思想が好くないよ」
「まあ〳〵、祐助はお黙りなさい。けれどもあなた、これは正三の一生涯に関係することですから、一応正三の意向も確め、私にも相談して下さるのがほんとうでございましょう？」
とお母さんも多少言分があるようだった。

家からお屋敷へ

内藤家では三男の正三君を花岡伯爵家へ御三男様のお学友として差上げることについて相談が続いた。忠義一図のお父さんは一も二もなくお受けをして来たが、二男の祐助君が異議を申立てたのに驚いた。お母さんも無条件の賛成でなかった。得心のような不得心のようなことばかり言う。お殿様や奥様の御懇望を考えると嬉しいが、正三君を手放すのだと思うと悲しくなる。姉さん達も女心は同様だった。そこでお父さんは、
「他人の中といっても、余所と違ってお屋敷だよ。お殿様は極く平民的で物の道理のよく分った方だ。奥様も情深い。奉公人が皆褒めちぎっている。しかし正三は奉公人として上るんじゃない。御三男様のお相手として万事御三男様と同じ待遇を受けるんだ。それから卒業すれば御一緒に

アメリカへ留学させて戴ける。正三の為めには出世の糸口が開けるわけじゃないか？」

という工合に好いことばかり並べ立てた。

「それはそうでございますよ。お屋敷の信用を得て置けば何処へ出るにしても都合がよろしゅうございますわ。けれども、あなた、これまで大きくしたものを見すゝ差上げてしまうんですから、私の心持も少しはお察し下さいませ」

とお母さんは痛し痒しだ。姉さん達も、

「不断は随分憎らしい子ですが、こうなると可哀そうでございますわ」

「お屋敷へ上ればとてもこんなに我儘は出来ませんよ」

と一種の人身御供のように考えている。

「どうもお前達は分らないね」

「いゝえ、お父さん、正三が多少犠牲になることは事実ですよ」

と兄さんの祐助君が又主張した。

「犠牲なものか、特典だよ、お前達は正三をお屋敷へ奉公にでも出すように言うが、決してそんなわけのものじゃない。お学友だよ」

「盆正月でなくても帰って来られますの？」

とお母さんが訊いた。

「藪入かい？　馬鹿だなあ。奉公人じゃあるまいし。日曜や休暇には大手を振って帰って来る。寄宿舎へ入っているのも同じことさ」

とお父さんは女連中を安心させることに努めた。

「お父さん、あゝいうお屋敷では家庭教師でも若様の御機嫌を取らないと勤まらないそうですよ」

と祐助君は反対論を続けた。

「そんなこともあるまい」

「いゝえ、僕の友達が矢張り旧藩主のところへ家庭教師に上っていますが、ナカ〳〵辛いと言っています。僕は正三が卑屈な人間にならなければいゝと思って、それを案じるのです」

「その辺は正三の心一つさ」

「正三、お前は正々堂々とやれるかい？」

「いや、それは俺が訊く」

とお父さんは慌てた。うっかり首を横に振られると大変だから、充分利益を説き尽くしてから正三君の意向を尋ねようと思っていたのである。

「お父さんのおっしゃる通り、これは或意味から考えると特典に相違ありません。それで僕は正三が何処までも男子の意気を失わない決心なら賛成です。例えば御三男様と相撲を取る場合、遠慮なく投り出してやるようなら宜しい。しかし若し御機嫌を取る料簡で行くようなら大反対です」

と祐助君は力強く言った。

「正三、どうだね？　さっきから色々と話した通りだ。承知してくれるかね？」

とお父さんは到頭直接本人に訊いて見なければならないことになった。

「承知しました。御三男様をひどい目に会わせてやります」

「それじゃ困るよ」

「僕は折角入った府立から私立へ移るのがいやですけれど、お殿様の思召なら仕方ありません。忠義を尽します」

と正三君は子供心にも伯爵の知遇に感じていた。
「そうでなくてはかなわん。流石にお前は侍の子だ」
とお父さんは大満足だった。
「正三、一生の方針に関係することだよ。もっとよく考えて見ろ」
と祐助君は念を入れた。
「お前は黙っていなさい。もう承知したんだ」
とお父さんは祐助君が打ち毀すのを恐れた。
「さっきから考えていたんです。お父さんがお屋敷でお受けをしてお出になったんですから、僕がいやだと言うと困るでしょう。兄さん、僕は正々堂々とやりますよ」
「お前がその決心なら僕も賛成だ。お父さん、実は僕は最初から全然反対じゃなかったんです」
「それじゃ変なことばかり言わないがいゝ」
「正三は承知さえすれば、忠義にも孝行にもなると同時に、自分の身も立ちます。けれども親や兄貴の権力で圧迫したんじゃ何にもなりません。自発的のところに値打があるんです」
「無論それはそうさ」
「それにこれから帝大を出るのとアメリカへ行って勉強するのでは将来が大分違って来ますから、本人の自由意思で定めさせたいと思ったのです」
と兄さんは兄さんだけのことがあった。
「お前も分らず屋のようでいてナカ〳〵考えているんだね」
とお父さんはこれも至極満足のようだった。
お母さんや姉さん達も決心しなければならなかった。しかし今まで一緒にいたものが急に余所へ行ってしまうのは矢張り心許ない。
お母さんはその翌日、
「家のお父さんという人は何でも私に相談しないで定める人だから困りますよ、お前達も気をつけていないとどんなところへお嫁にやられるかも知れませんよ」
と厭味を言った。
「でも縁談は御相談なさいますわ」
と一番上の貴子さんは笑っていた。
「正三のことは私もう諦めました。お受けしないで帰っても、矢っ張り詰まりはこうなるんですわ。お殿様と奥様お二人の思召ですからね」
とお母さんは納得もしているようだった。尚お、
「それに始終お屋敷へお出入するようになれば、お前達の縁談にはどんなに都合が好いか知れませんわ」
と慾張ってもいた。
「なぜでございますの？」
「お父さんも私も矢っ張り御家中の人でなければいけないと思っていますから、お屋敷へ上って丁度好いお婿さんを御詮議して戴きますわ」
「まあ！　いやなお母さん」
「いゝえ。うか〳〵しちゃいられませんよ。君子ももう十七ですからね」
「あら、私、そんなことどうでも宜いんでございますよ」
と君子さんも縁談と聞くと直ぐに赤くなる。
内藤さんの家庭は三百石を忘れないだけあって極く昔風だ。

四日目の午後内藤さんの門前に伯爵家の自動車が止まった。

「お母さん〳〵、お屋敷の奥様でございますよ」

と君子さんが血相を変えて注進した。お風呂場で洗濯をしていたお母さんは、

「あらまあ、どうしましょうね？」

とシャボンだらけの手で天手古を舞った。

「困るわねえ、平民的過ぎて」

貴子さんも狼狽した。実は事によるとほんとうにお出になるかも知れないと思って三四日用心していたのを生憎今日から油断したのだった。

「御免。御免」

ともう運転手が玄関で呼んでいる。

「はい。はあい」

と君子さんは初めて気がついたように取次に出る。その間に貴子さんが客間を検分する。お母さんは髪を撫ぜつけたり着物を着替えたり大騒ぎだ。いくら拭いても汗が流れた。

これは内藤家代々を通じて最も光栄ある日の一つだった。奥様は三十分ばかりお寛ぎになってから、御機嫌麗しくお引取りになった。祐助君は不在だったが、皆々有難いお言葉を賜わったこと申すまでもない。お母さんはもうすっかり、得心が行った。後から奥様を褒めるや褒めないではない。

「あゝいうお優しいお方なら、私、もうなんにも申すことはありませんわ。『子持は相身互身です。このお子さんを手放すお心持は私もお察し申上げておりますから、決して悪いようには計らいません』と涙を浮かべておっしゃった時、私もホロリとなって、これではどんな犠牲でも喜んでお引受けしなければならないと存じましたよ」

と矢張り侍の娘である。夕刻主人公が役所から帰るのを待ち佗びて、

「あなた、どうぞこれからお礼を申上げに伺って下さいませ」

と意気込んでいた。

「まあ〳〵、今夜直ぐにも及ぶまい」

「でも、あなた」

「又お土産を頂戴したんだね」

と内藤さんは恐縮だった。

「奥様は正三を御覧がてらお出になったのかも知れませんわ。出来そうな子ですって褒めて下さいましたよ。それから『子供は相身互身です。このお子さんを手放すお心持はお察し申上げて居りますから』って涙を浮かべておっしゃいましたの」

とお母さんはお土産よりも、これが何よりだった。姉さん達は姉さん達で、それから二三日の間、

「弟が伯爵家へ若様のお学友に上りますのよ、それで奥様が態〻お出下さいましたの。宅の母と五つしか違いませんのよ、お若いんでございますのよ」

と会う人毎に吹聴した。

次の日曜に正三君はお父さんに連れられてお屋敷へ伺った。お殿様にもお目通りを許されて、イヨ〳〵お学友と定った。

「照彦には丁度好い相手だ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com